



カウンセリングと

道徳授業の思い出

山下一夫

●学際的で実践的な生徒指導学を目指して
 鳴門教育大学が現職教員の研修等のための新構想大学として、大学院生を初めて迎え入れたのは昭和五九（一九八四）年四月であり、学部生は昭和六一年である。そして、私が本学の生徒指導講座に赴任したのは昭和六三年一〇月であり、翌年、平成元年となる。

この生徒指導講座では初代の講座主任である臨床心理学の倉戸ヨシヤ先生の下、タコソボ型の教育研究体制に陥ることなく、学際的で実践的な「生徒指導学」の構築を目指した。学際的とは、大学教員と院生が協力し、教育学・臨床心理学・精神医学などの知と学校教育現場における知を統合し生徒指導における新しい知の枠組みを構築していくことを意味している。また、実践的とは、教師が日常の生徒指導を行ううえで、わかりやすく実際に役立つ根本的な考え方や態度を論考していくことを意味している。

生徒指導学を目指すとともに、生徒指導の力量を向上させるうえで、事例検討の授業は大いに有効であった。すぐに理論や対策を持ち出すのではなく、まずなにより発表者の話と共に耳を傾け、子どもや状況を理解するように努め、皆で一緒に考えること自体が、私も含め参加者全員大いに勉強になった。また、講座内の仲間意識や同僚性を強くすることにも役立った。まさに「チーム学校」の原型といえる。

●七條先生と徳永先生

平成五（一九九三）年、本講座に道徳教育担当教員とし

サルトル（一九四六）の、実存とは自らの存在を自らが選択する主体性を意味している、に通じる。彼は、かつての教え子が戦争に行くべきか母親の生活を助けるべきか悩み、彼に会いに来た例をあげ、「君は自由だ。選びたまえ。つまり創りたまえ」という返答しかもたなかった、と述べている。

相談者が何かを決断しなければならぬという、実際のカウンセリング場面なら、相談者とカウンセラーはともに悩み、いくつもの手を考え、そしてそれぞれの手のポジとネガな点を検討し、ときには試行錯誤し、最終的に相談者自らがどれかを選択し、その選択を後悔しないと決意するまで、何回も面接することになる。

●和田先生

和田修二先生は、河合隼雄先生や 皇紀夫先生とともに、昭和六三年、京都大学大学院に国内初となる「臨床教育学専攻」を設置した。ちなみに、そのときの臨床心理学講座の助手が私である。

平成一〇年に明石海峡大橋が開通し、京都駅から鳴門まで高速バスで二時間半ほどで来られるようになった。そこで平成一二年度に、京都大学名誉教授の和田先生に本学の客員研究員として月に一回来ていただき、私と徳永先生が世話役となり道徳教育・道徳授業の勉強会を行った。

和田先生から多くのことを教わり感銘を受けたが、その一つが次の言葉である。いまの子どもは変わったと言われるが、子どもを取り巻く環境は変わっても、親や周りの大

て赴任したのが七條正典先生である。先生は本講座の大学院一期生であり、いまで言う「実務家教員」である。七條先生が文部省に異動し、その後任として平成九年に本講座に赴任したのが徳永悦郎先生である。

徳永先生は平成一四年に四九歳で亡くなられたが、先生、七條先生、私の三人は何かと馬が合った。同学年ということもあるが、お互いに対話を尊重し、世話好きで、共に生徒指導講座を盛り立てようとしていた。また、二人は小学校教師、私はカウンセラーという人間関係を基本にした職業を、自らのアイデンティティの核にもついていたので、近しく感じたのであろう。私にとって二人は、一緒に仕事をしたいと思う人たちであり、そのとおりの人たちであった。

二人の先生によって、私は道徳教育や道徳の授業実践に関心をもつようになり、カウンセリングと道徳授業は共通するところが大きいように思うようになった。

●自らが自らの答えを求め決断する

徳永先生は、コールバーグ理論に基づくモラルジレンマ授業に取り組んでおり、大学の授業においても、大学生を主人公にしたジレンマ資料をもとに、学生たちに考えさせ議論させていた。

カウンセリングでは人間関係において、相手と自身自身、そして二人の関係、さらに二人を取り巻く人々や環境、あるいは時の流れも考慮し、自らが自らの答えを求め決断するという行為を大切にしている。

人をまねて物事を判断し行動するという子どもの本性は変わらない。大事なものは大人が自分の姿に学ばせられるようになることである。

●手品師

この勉強会で珍しく徳永先生と私の間で大論争になったことがあった。それは、道徳資料として有名な「手品師」について、私が「作者や教師の『誠実さ』や『うそをつかないこと』への感動を押しつけられているようでいやな気がする。手品師に共感や役割取得するのがむしろかしい子どもはけっこう多いのではないか。ひとりよがりの安っぽい作り話に思える」と批判し、徳永先生が反論したのである。

さらに、大学院で二人が担当している「生徒指導論」の授業で急きょ一コマ時間をとり、百人を超える院生の前で論争の続きを二人でした。結論は出なかったが、院生も加わり皆で大いに議論したことも、懐かしい思い出である。

文献

- ・ Sartre, J.P. (1946) *L'Existentialisme est un humanisme*. Paris: Nagel. (伊吹武彦訳『実存主義とは何か―実存主義はヒューマンイズムである』人文書院、一九五五年。)
- ・ 徳永悦郎『ジレンマ学習による道徳授業づくり』明治図書、一九九五年。
- ・ 山下一夫『生徒指導の知と心』日本評論社、一九九九年。
- （やましたかずお 鳴門教育大学学長）